

感謝の念に堪えません。

宗師 鈴木秀美は、伊達政宗の家臣である鈴木元信の系統にあたるスピチュアルカウンセラーです。

私の祖母にも同様の力がありましたが、今程に女性が発言して行く事は受け入れられておらず、女は嫁に行くことが主流だった為か人を救えるなら日本国を救ってみろと言われていたそうです。

母のお腹に命を宿していた頃の記憶を今でも憶えています。

お腹の中で突き動かされる使命感にも似た感情が生まれていたことを、それは後になり確かな現実と知ることとなりました。

お腹の中が窮屈に感じ、動きが取れないと思い乍らと共に何か不音な空気を感じたというよりは、全てを把握していたかのように、動けない私は思いを一つにして、念ずるを意識し発信していました。

後にそれは、近所に泥棒が押し入り、昔は近所同志の付き合いもあって、「鈴木さんの裏に逃げたわよ！」と聞こえたところには、泥棒が家へ侵入しようとした瞬間でした。

そこには2才になる兄と母が一触即発に立たされていて、泥棒は侵入を諦めて、奥の山手に逃げて行ったそうです。

この話を母から聞いたのが、小学校一年生でした。

絶対に何が何でも、護るという感情が働いたことを子供乍らに母に話しました。

母はニコニコしながら、「あらまっ！おばあちゃん似なのね！」と意に介さず話していました。

育つにあたっては色々な経験をしましたが、兄妹ゲンカ（喧嘩）ができなかった事、感情にまかせた思いを思いつづけてはいけないと知りました。

又、今からすれば、佛様の霊だったのですけれども、いつも会う霊でしたが、私と会うとすれ違った後にふり返ると居なくなってしまうので、何で逃げるのか、何で嫌がるのかが分からずに霊に怒っていました。

長い髪の女の人が白い着物をだらしなく着て、泣き顔で外に立ってメソメソしているんですね。

私は子供でしたが、いつも良く思っていなかった時に今日こそはと「お洋服はきちんと着て、泣き顔では外に行かず、顔を洗ってシャキッ！としてから、お外に出なさいとお説教していました。」

動物とも会話して子供時代を過ごしました。

幼少の頃は特別な「力」とも思わないで、日々を過ごしてまいりました。

10代の頃には、日本の現実としての飢餓の世界を見ました。

恐ろしくも感じて居たら、自分自身の思いや考えによって変えられると使命感につき動かされてもいました。

その頃に、師と仰ぐ方に出会いました。そして、今ある力を身につけて、根付けるように学びました。

一生師の元で、しばらく学ぶつもりでおりましたが、何故か師は弟子全員を集めて、辞める事を宣言したのです。

その折には弟子ひとり、ひとりに今後はどうするかとたずねられると、皆、口々に全員が師に習い辞退宣言をするのです。

けれども私は一生懸命修業して来たので、私は神様に祈りつづけます。と告げました。そんな20代の頃を過ぎ去り、30代の頃には沢山の方が訪ねて来て下さる様になり、今に至ります。

色々沢山の方をお導きさせて頂く中でも印象に残っている感動は難病と言われているクローン病の疾患されていた祖母より、依頼が有り、回復に導けたこと。

産まれたての赤ちゃんが、産まれて一度もミルクを飲まず、医者から諦めて下さい。と言われてご家族からの依頼により、導けて、祈祷した30分後からミルクを飲み始め元気に育っていること、お嫁さんから虐めを受けていた姑さんを救済できたこと。

寺の住職様より、佛様との会話を繋いだり、鎮めるお手伝いをさせて頂きました。

現在も弟子指導をしながら道開きのお手伝いをさせて頂いております。